

当選作所感

平林初之輔

青空文庫

「あやかしの鼓^{つづみ}」

はじめの方は、私にはそうとう読みづらかったが三分の一くらいまでくるとだんだん面白くなって、ついひきずられて読んでしまった。なかなか手にいった書きかたで、作者の並々ならぬ手腕を偲ばせるところもあるが、私は、主として不満に感じた点だけをならべる。

まず全体の筋が「あやかしの鼓^{はなし}」につきまとう、因果ばなしめいた一連のお噺であるのが、私にはもの足りない。鼓の「崇り」などは迷信だと極論するわけでもないが、迷信なら迷信で、もっ

と凄味と神秘の色とを濃くしてほしい。「崇り」を科学的に分析するなら、もつと徹底的に俎上にのせてメスをふるってほしかった。全体に中途半端の感じがする。現代と徳川時代とがまざりあっていて、よく融合していないといった感じだ。ちょうど、洋館の中で、椅子に腰をかけて、講釈師の浮世話をきいているようだ。最後のたたりは、ある未亡人の変態性欲で説明されているが——これとても現代式吉田御殿といった感じで、私にはぴったりのなかつたが——それ以前にどんな崇りがあつたのかは、田舎のおばあさんからたわいもない土地の昔話をきくようで一向たよりがなかつた。

最後にばたばたと事件が整理されて、刑事や監獄などが出てく

るのも、前の方の落ちついた空気をぶちこわしている。そうして、こういう話の大団円としては少しくどすぎるように思った。

要するに、作者が、鼓につきまとう奇縁を全くの「偶然と一致」としてとりあつかうでもなければ、全く神秘そのものとしてとりあつかうでもないところに内容の分裂があつて、そこからすべての欠点が生きているように思う。

「窓」

この作者の筆は、「あやかしの鼓」の作者のそれに比べると、いくぶん慣れないところがあるようだが、事件の構成ががっしり

とできている。

調書や証言の類を排列していつて、それによつて次々に事件を解決してゆく手法にも、新機軸がうかがわれる。まるで事実の記録みたいだという非難もあるかもしれぬが、その非難はかえつてこの作の強味を語っているように私は思う。事件の中へ泥棒を点綴んてつしたのは、はじめのうちは、わざと事件を複雑に見せるだけのためのように思えたが、最後になつて泥棒にも重大な役割を演じさせて、ただの端役はやくでおわらせていないところもよい。

ただし唾おしの女中を、もう少し何とか工夫できなかつたものだろうか。せっかく妙な人物を出しておきながら、ただ消極的な役割だけしか演じさせていないのは物足りない。

冒頭の数頁は、何だか謎々の課題を出して、それをあとから説明してゆくようで、少し陳腐のきらいがある。むしろなくもかなと思う。

とにかく、極めてありそうな事件を、極めてありそうな手続きでしらべてゆきながら、しまいまで探偵的興味をつながせているので、読みかけたら一いきにしまいまで読まずにはおかせないのがこの作の強味である。

甲乙をつけるとなると、まるで変わった性質の作品だからちよつと困るが、私の好みからいうと「窓」の方がすきだ。

（『新青年』第七卷第七号、一九二六年六月）

青空文庫情報

底本：「平林初之輔探偵小説選2」[#「2」はローマ数字、1-13-2
2]「論創ミステリ叢書2」論創社

2003（平成15）年11月10日初版第1刷発行

初出：「新青年 第七卷第七号」

1926（大正15）年6月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2010年12月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

当選作所感

平林初之輔

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>